

資料：高知ダルクによるゲストスピーチ逐語録
— 高知大学「教育科学基礎演習Ⅰ」（2022年5月27日） —

加藤 誠之・高知ダルクの皆さん

高知大学学術研究報告 第71巻
抜刷（2022）

資料：高知ダルクによるゲストスピーチ逐語録
—高知大学「教育科学基礎演習Ⅰ」（2022年5月27日）—

加藤 誠之¹・高知ダルクの皆さん²
(¹高知大学人文社会科学系教育学部門・²高知ダルク)

Document : A Literal Record of Guest Speeches by the Members of Kochi DARC in “Basic Exercise of Educational Science I ” (27th May 2022 at Kochi University).

Masayuki Kato¹, Members of Kochi DARC²

¹ Education Unit, Humanities and Social Science Cluster, Kochi University

² Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)

ABSTRACT : We had guest speeches by the members of Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center) in “Basic Exercise of Educational Science I ”(27th May 2022 at Kochi University). This document is the literal record of these guest speeches.

キーワード：自助グループ，薬物依存，実体験
Keywords : self-help group, drug addiction, actual experience

第1章 はじめに

筆者（加藤）は2022年5月27日（月）に開講された高知大学「教育科学基礎演習Ⅰ」で薬物乱用経験者の自助グループ高知ダルク（DARC, Drug Addiction Rehabilitation Center）のメンバーをお招きし、ゲストスピーチを行っていただいた。本稿はこのゲストスピーチの逐語録である。聞き取れなかった箇所は「…（中略）…」とした。[]内の文言は筆者（加藤）による注又は補足である。

第2章 高知大学「教育科学基礎演習Ⅰ」（2022年5月27日）でのゲストスピーチ

【ワコさん】

今日、まだ他にも仲間がいるんですけど、きょうはちょっと都合で5人しか来てないんですけど。何の話ってというか、自分の話をしなくてはいわれたんですけど。私はこの4月で今回、高知のダルクで入寮して3年になります。今、50歳なんですけど、42歳、43歳の辺りに高知のダルクに、入寮してて。1年足らずで出て、退寮して、使って捕まってっていう、またくり返してるんですけど。

薬物をし始めたきっかけっていうのは、子どものときから、世間っていうか、周りの人たちにいわれれば、幸せな家族だねとか。いいよね、ワコちゃんち、みたいな感じでいわれてたんですけど。実際、自分的にはそうじゃなくって。両親が共働きで、一番小さい私は2歳ぐらいから預けられてる時期があって。そのときに寂しい？って聞かれて、寂しくないとしかいいようがなく。取りあえず、ずっと笑ってる状態してましたね。そのときはそんなに、しんどくはなかったです。今、思えば、かなり寂しかったんですけど。きょうだいが二人いるんですけど、いたんですけど。小学校の高学年になって兄の暴力が始まりました。そのときも兄は顔をやらず体をやる。私は親に分かったら、やっぱり悲しむし、とにかくずっと笑ってる状態を続けてました。

それをずっと続けてて、中学校になって、不良グループっていうか、三つぐらい大きいグループがあったんですけど。その中の一つにいて、その中の友だちとけんかして、1年半ぐらい中学校、ずっと行ってなかった時期があります。その頃にはシンナーとか吸ってて。結局、兄からのしんどい部分なのか。例えば、父親が、私が学校休んでる。なんでおまえ、学校行かないんだって。金あるから学校行けって。そういう親やって。また金かって思って、どんどん私は、嫌気が差しました。勉強も姉から押さえ付けられて、勉強させられるっていうイメージしかなくって。だから、すごく勉強が大嫌いでした。学校もあんまり好きじゃなかったです。

15歳ぐらい、ちょっと覚えてないんですけど。シンナー吸いながら私、出身、広島なんですけど。広島駅の近くの川でシンナー吸ってたら、上から声掛かったんですよ。危ないぞ、そこで吸ってたって。中で吸えていわれて、友達と上に上がったたら、そこが今でいう暴力団の事務所やったっていう。それから、だんだん、そういう暴力団の人たちと絡むようになって。ある日、事務所に人に拉致、監禁されて、漬けられました。本当に動けないぐらい、ずっと言葉もしゃべれないぐらい覚醒剤、打たれて。3日、監禁されて。下、下着もはいてない状態で、街中に捨てられましたね。タクシーをどうにか拾ったんですけど、家まで帰って、親が何してたんだって言われたから、シンナー。うちの家、ちょっと聞いたらかかしい。シンナーは、私が家に帰ってくれば、シンナーはOKっていう家だったんです。その頃は。だから、シンナー吸ってたっていう、自分ではしゃべったつもりなんですけど。そういう状態で。部屋にこもりましたね。

それから、今の覚醒剤より昔の覚醒剤がよくて、ずっと効いてるんですけど。そんだけ打たれるもので、切れ目がきて、体がガタガタ震えて、寒くなったりしてとかって。うちの父親は、昔か

ら広島だから『仁義なき戦い』のヤクザ映画を見てて、自分の頭の知識で、打てば治るとっていう軽はずみな考えで、またヤクザに出会いまして、持ってきてもらってっていうのが始まりですね。常用しだした始まりです。

それから 21 の終わりで結婚してるんで、間、水商売をやったりとかしてて、結婚すると同時にやめました。それは結婚した旦那さんとの約束で、悪いことは、やめるっていうのと、友達とは一切、連絡取らないっていうのと、お店をやったのを畳むっていうことで、それも全部守りました。子どもが生まれて、真ん中の息子は、耳が悪くて、聾学校行ったりしてた子で、旦那と結婚してすぐ、元の主人の暴力が始まりました。それからっていうもののっていうか、自分の見る目がないのか、そういう人を選ぶのか。ほとんど私は殴られてますね。殴られて相手っていうか、だから、私は男に負けたくないっていう気持ちで、すごく今でも強いです。

それで、旦那と結婚して離婚しなくっちゃ、子どもも殴られるしって思って、5 年、離婚問題で 5 年かかって、29 ぐらいで離婚してもらいました、やっと。服とかも結婚してる時にジーパンも、なかなか買ってもらえない。穴が開くまでジーパン買ってもらえない。夜、仕事してて、お金あったのにブランド品持ってってしてたのが、本当に地獄だったっていう。ただ、救いだったのは、子どもたちなんですけど、だけど、そういう生活も、これも理由付けなんですけど、そういう生活からの離婚からの解放と、やっぱり子どもが熱を出したら仕事を休まなくちゃいけない。でも、働くときに子どもがいても仕事ちゃんと出れますかっていわれたらいうしかないんです。雇ってもらわなくちゃいけないんで、本当にコンビニで仕事してるときに、なんか私の名字呼ばれて、誰だこいつと思って、昔の私が覚醒剤をやったことを知ってる同級生だって。

夜、子どもを連れてその人とご飯を食べに行った帰りですね。車から、打たなくちゃ帰さないって。子どもは泣き叫ぶ。本当に、そんなとき、やりたい気持ちにならなかったですね。だけど、たった 1 発で帰してもらえらんだったら 1 発ぐらいいいじゃんと思って、友達のところに取りに行って、そのとき打ちましたね。一気に解放、気持ちよかったですね。本当、縛られて殴られて、1 日 1 時間しかない睡眠時間の中の主婦生活で、めちゃくちゃ解放でしたね。でも、そうになると、自分の薬物がある生活がすごく大事で、だんだん自分が覚醒剤を売る仕事をしたりとか、いろんな覚醒剤だけじゃ、いろんなこともするんだけど、3 年前の刑が終えたので、刑務所は 4 回行ってます。

いちばん最初に捕まったときに、子どもが母の目に、折り紙で花を折ってくれた色紙が送ってきたりとかして、泣くんですよ。演技じゃないけど、涙が出るんですね。そのときは本当に、もうやめようかって思うんですけど、思ってるけど、やりたい。そういう気持ちがすごくけんかしてて、だから、何回も裏切った私は家族からは、今でも多分、不安材料の一つだって思います。何年も何年もかかったんですけど、このゴールデンウィークに広島から家族が来てくれました。依存症っていても、薬物だとかアルコールもあるし、人間依存もあるし。特に私は、薬物と男性とギャンブル。他にもいろんな依存があるんですけど。

つい最近でいえば、今年ですね。薬物がらみの人、薬物関係の人と出会うことがあって、昔の私だったらどうにか電話番号教えてもらおうとか、いろんないろんなうそついて、どうにか手に入れるんですけど、それはしなかったですね。薬物を使ったしんどさも知ってるし、薬物をやめるときのしんどさも知ってるし。薬物をして失ったものが、すごい大切なものだっていうことも、だんだん分かってきた、けど、忘れる。忘れる、何かあるたびに忘れます、今でも。刑務所入って、塀の中で、外の情報っていったら、1 日 2 時間のテレビ。一人 5 分の新聞ぐらいしかなくって、手紙も好きなように出せないし。でも、うちの母親は共依存が、めっちゃひどくって、私もすごい強いんですけど、子どものためなら、何でもやる。子どもがやることは私が悪い。今でもそうなんですけど、すぐ謝るんですけど、私が悪かったって、全く悪くないんですけど。ただ、母がそうやって今でも私が

悪いからって言うことが、今、すごくつらいです。お父さんがお金だらけの人生って思うけど、最近愛情の表現の仕方が下手な人って思ってます。お母さんもそういう性格やけど、そういう接し方しかできないっていう。

兄は、ちょっと今、調子悪いんですけど。私もう今、調子悪い準備してるんですけど、毎日自分、朝起きて。去年兄が亡くなって、7月の2日に亡くなったんですね、ガンで。すごい恨んでた兄なんですけど。本当に私の手で殺してやりたいぐらい恨んでたんですけど。だけど、今でも、人のせいにして、怒って暴言吐いてっていうことをよくやるんですけど。怒ってても、時間の無駄だったなって。ただ、でもそのときには、そういう感情しか持てなかったなっていう。もっと昔に、こういうダルクとか、相談できる場所、相談できる人がいたら、少しは変わってたのかなと思います。私らの時代は、先生っていったら体罰。なんかあったら殴られる、ビンタされる。警察もそうですね。私は女性だからだけど、男の友達はみんな、警察の道場、すぐ上、上げられて、道場の中でやられるっていう。そういう感じの組織でしたね。学校も警察も。だから、今、みんな、住みにくい世の中、いろんなことが事件になって住みにくい世の中って思うけど。ある意味、私らの時代に比べたらいいのかなと思ってみたいもします。

今、ちょうど4月で3年になって、それまでに私は、いま入寮してるんですけど、いま仲間と一緒にいられなくて一人暮らししてます。施設の一人用の寮で一人暮らししてます。最近、仲間といるのが楽しいとか。一人は寂しいとか。その気持ちに気付けるっていうか。特に寂しいとか、そういう部分に気付けたのっていうのは本当、最近です。でも、女性ならではの「の」傷を持って、一人じゃどうにもやめられなくて、やめたいっていうか、生きたいとかね。やめたいとかね。使いたくないとかね。使っても家族とか友達とかは逃げるかもしれないけど。仲間は逃げないんです。そういう環境が多分、私には、これから大事なのかなと思います。だから、先生になったら、やっぱり自然と話したくなる先生になってほしいかなって思います。話してよとかじゃなくて、自然と先生のところに行きたいなって思うような先生になってほしいなって思います。

【ミツエさん】

私は小さいころから母親の暴力を受けてきました。小学校6年生、5年生ぐらいのときに、母親から私はアルコール依存症なんだっていうふうにいわれて。私は、そのときすごい衝撃を受けましたね。夜が眠れなくなったり、すごい夢を見たりとか、そういう日々をすごく過ごしてきました。そのときに私が頼ったのは、処方薬。小6ながらも、自分の母親が飲んでる薬を使いました。そこで、私が覚醒して、今までに思ったことのない感覚っていうか。今まで持ったことのない感情だったり、落ちつきだったりとか。夜がすごく眠れたんですね。そのときに、私は初めて処方薬っていうものは、神だと思いました。処方薬は神だなと思いました。神からの何か魔法の薬だと思いました。私は、そのときからずっと処方薬を飲み続けるんですけど。母親の暴力は止まりませんでしたね。だけど、処方薬があれば、何とか救われる。何とかこの痛さからも救われる。そういうふうにして、処方薬を飲み続けましたね。中学校になったときに、処方薬っていうものをどこで手に入れたらいいのか。どうしたら手に入るのかっていうのを知りたくなって。私は、お母さんのを盗んで取ってたんで、分からなくなっちゃって。自分で探すんですね。どうしたらいいのかとか。友達に聞くんですけど。全く分からない。友達がある薬があるよって言って、いい薬があるよって言って、それが覚醒剤でしたね。それが初めての出会いでした。

私は使い続けて少年院に入ることになりましたね。鑑別 [=少年鑑別所] から少年院に入るようになって。そこで、2年ぐらい入るんですけど。取り戻すと思ってたんですね。そこで私は治ると思ってたんですけど。少年院でも神様の薬、処方薬は出るので、もっと依存してく。すごく依存体質

になってきましたね。母親からの面会があるのかっていったら、ないし。友達に手紙を送るかかっていったら、それもできない。そんな状態で私は2年間、ただ過ごす日々の矯正施設の中での日々でした。でも、頭の中に残ってるのは薬。どうしても使いたい薬。それがずっと残ってましたね。そこから出所するんですけど。出所しても、やっぱり一番真っ先にいくのは薬で、母親が迎えにくるんですけど。迎えに来たときに、なんで出てきたのって言われたんですね。そのことを思い出すも、今でも震えが止まらないんですけど。すごく憎かった。すごく苦しかった。なんで出迎えてくれないんだろうって思いましたね。

それで私は、もう一回、薬に走ることにになりますね。酒やたばこや何でもしてきましたね。そこでまた薬と出会うんですけど。その使い方がすごく大胆で。生死をさまようぐらいまで、薬を使い続ける。自分の体重が摂食障害っていうことにも気付かず、私は食べて、吐いてっていうことをしてたんで、25キロぐらいまで下がりましたね。生死をさまようことになって。そこでも薬をまだ使うんですけど。一回、薬のカロリーまで気にし始めて、薬をやめたんですね。カロリーが気になってやめました。薬をやめたのはいいんだけど。そこから切れ目、さっき仲間もいったように、切れ目が襲ってくるんですね。どうしようもない脱力感というか、どうしようもない、いら立ちもないし、感情がない。全くもうどうしようもない。どこが、かゆいのか分からないのにずっとかきむしってる、みたいな、ムズムズ感というか。そういうのがずっと襲ってきて。それでまた夜も眠れないので、また処方薬に走るんですね。処方薬に走って覚醒剤に走って、処方薬に走ってっていうのを繰り返して、ズタボロの状態で、私はまた捕まりました。

最終的に警察に頼ることしかできなくて、自分の子どもも手放しました。その瞬間に。私は2人の娘と息子がいるんですけど、その前で警察に電話をしましたね。助けてくださいと。そこからまた捕まることになるんですけど。それもまたたんたんとする日々で、やっぱり処方薬を出してくれてっていうふうな形を取って、ずっと処方薬を飲み続ける。もちろん、矯正施設の中には依存症っていうものは、あまりいわれないというか、問われないんですね。だから、その中で薬を出してくれていったら出してくれるんですよ。薬を出してもらうんですけど。また、それで自分の病気、アディクションにかかっているとか、依存症っていうのが、私、知らなくて。ずっと使い続けるんですね。出所の日が来て、これ、もう一回薬使えるわって、また同じ気持ちなんですね。

名古屋のほうに、私は三重県なんですけど。名古屋のほうに施設があって、その施設長が、すごくいい人で、助けてもらいました。助けてもらって、その職員をしないかっていわれて、私、職員だったんですけど。職員をしながら、また薬を使うんですね。もう訳分からない状態ですね。職員、人の世話をしながら薬を使うっていう。全く自分の中で未知の世界だったんですけど。それをずっと繰り返しましたね。

そこから、[宮本]容子さんと出会ってっていうか、その施設長の方が容子さんを知っていて。高知に来なさい、あなたはっていうふうになって、容子さんと出会うんですけど。そこから私は、まだ今、3カ月になる手前ですね。この講演が、このスピーカーのスピーチが、すごくチャンスだなんて思いました。自分のことも振り返れるなって、すごく思います。容子さんとお会って、今も、がたがた震えながら、しゃべってるんですけど。容子さんとお会って、今、四つ目のキータグをもらう手前ですね。キータグっていうのは、1カ月ごとにクリーンな状態。依存症、薬を使わない状態を表すものなんですけど。それがやっと四つ目に入るところです。だけど、今もまだ薬を使いたい。どんだけ飲んでたりとか、使ったりとかしてたんだけど。それもまだしたいっていう欲求はすごくあって。自分でも抑えられない。だから、仲間に手助けしてもらうんですけど、それがすごく効果があって、自分で財布を持たないとか。買い物は仲間と一緒に買い物を回ってもらうとか。仲間ってすごく大事ですね。

共同生活してる中でも、薬のテレビとか、ふとしたときに見るんですね。そういうときに、私、こんな、なってたんだって、すごく訳の分からない動作をしていたりとか、すごい発言をしていたりとか。私、こんなだったんだって、いまさらながら思いますね。すごく恥ずかしいなっていました。ダルクにつながって、そういう新鮮な感情も湧いてきて、自分の気持ちとかも素直に話せるようになりましたね。まだまだなんだけど、これからなんだけど。先が怖いのもあるんだけど。私は子どもと一緒に暮らしたい。もう一度、笑った笑顔がみたいっていうふうに思ってます。それがかなうのは、何十年ってかかるかもしれないけど。私は依存症っていう病気にかかってるっていうことを自分の中で分かって、すごくよかったなって思います。今まで依存症って病気なんだって、知らなかったの。だから、すごくよかったなって思いますね。依存症はかなり怖い。かなり怖いっていうか、取り返しがつかない病気。治らないっていう病気なんですね。だから、私はそれと一緒に向き合っていこうかなって思ってます。以上です。ありがとうございました。

【ルリさん】

まず、私が持ってる病気っていうのが、薬物依存症と摂食障害、太るのが怖い、主についていうのと、リストカットと男性依存が主っていうか、一番前にあるんですけども。小さい頃の話からすると、小さい頃は、実の父親が暴力的っていうか、仕事行ったふりして帰ってくるっていう。その間は仕事辞めてたんですけど、父親は。私、三姉妹なんですけど。母親と父親と住んでたんですけど。めちゃくちゃ、毎晩、母親と父親は夜、リビングでけんかして、私はふすまを開けて、けんかしてる、また、みたいな感じの日々をずっと送ってました。

実のお父さんが、私からすると、母親のお母さんのことがすごい怖くて、お母さんがおばあちゃん、呼んできて言うて、家近かったんで、おばちゃん家まで行って、夜な夜な呼んでっていうのをやってたりとか。結構、なんかハードだったなって思います。記憶っていうのが正直、あんまり小さい頃の記憶がないんですね。多分、覚えてたくないというか。解離性障害を起こしてたのか、よく分かんないんですけど。母親のご飯が何がおいしかったとか。家族とどこに行ったとか。覚えてないんですね。私が唯一、覚えてるのが、保育園で迎えに来たんですけど。迎えに来た相手がお母さんじゃなくて、お母さんの友達だったんですね。あれ、どうしたのって聞いたら、きょうからお引越しねってなって。お引越しするのに、そのときに父親と母親は離婚してて。急にお引越しになって、母子家庭で、それから15歳まで環境が変わってやってくんですけど。

その間、すごい悪いっていうか、響きが嫌で、ずっと認められなかったことがあって。母親からの暴力っていうか、今でも認められてないっていうか。すごい共依存っていうお互いが離れられない関係だったので。母親の暴力も、私が悪いことしたから殴られてるんや。怒られてるんやっていうふうに、そこを受け入れて我慢してました。だから、はだしで外、ほっぽり出されるのも普通だったし。物音が常についていうか、怒られるたんびにバンとかドンとか、やられてたので。今でも電車のキーって音とか、急に雷が落ちる音とか、ドアがバンって閉まる音とか、全部、今でもビクッてします。それが今でも出ます、やっぱり。

15歳のときに母親が水商売をしてたんですね。私たちを養うために。その水商売の仕事場で出会った、今の父親になるんですけど、義理の。と、出会って母親が再婚して、それから15歳から新しい家を建てて、一緒に家族で住むんですけど。私は父親の存在を途中から、どういう存在かっているのを、正直あんまり愛とか、こうやって育てられたっていうのを、はっきり受けてないので。父親がすごい嫌でしたね。変な、ちょっと知らないおじさんみたいな。が、ノコノコと私たちの家族の輪の中に入ってきたぐらいの感じで思ってた。

まだ一緒に住む前にディズニーランドに行ったんですね。今の父親と家族に行ったんですけど。

そのときに、私、多分、行ったことある人は知ってると思うんですけど、真っ暗な状態で上がって、窓が、ドアみたいなんがあって、ばあって落ちるやつあるじゃないですか。隣に今のお父さんが乗ってて、私の、手をつないで、いやあってやられたんです。私はそれが怖くて、嫌だと思って、私、絶対この人、無理と思って、その後、お姉ちゃんにちょっと無理やねんけどとか言って、あの人、お父さんとは思えへん。受け入れられへんって、ずっと受け入れられない状態で、でも、妹はすごい人なつっこくて、わがまま言えるし、甘えん坊だし、すごい上手だったんですね。父親と関わるのが、お姉ちゃんも親離れみたいなのしてる時期で、私だけが父親は、そんな好きじゃないし、母親は水商売してるときは、常に家にいなかった状態だったので、家にいる母親っていうので、うれしかったんですけど、ゆくゆくはぎこちない家になってって。

ある日、私が父親と母親の財布から、お金を取るようになったんですね。それは使う前から、取るようになって、それは遊ぶお金だったり、そのときはお酒飲んだので、15歳から、だから、お酒買うお金だったり、そんなときもたばこも吸い始めてたので、たばこ買うお金だったり、そういうので、お金が足りない。お小遣いもらっても足りない状態で、母親と父親のお財布から、こそっとお金取って、部屋まで、こそこそ忍び足で部屋まで行って、お父さんの足音が聞こえてきて、階段上ってくる。私、あんときおかしかったなって思うのが、ばれると思って、瞬時にお父さんの部屋の大きいカーテンの裏で、こうやって立って、ばれへんように、ずっと息を殺して、お父さんが降りてくのを待ってたり。そんな病気全開の生活を使う前から送ってました。

ある日、父親が、私が余りにもお金を取るのでビンタされたんですね。初めて父親にビンタされて、おまえはいい加減にしろといわれて、なんだ、このおやじって思って、そのときに、おまえなんかお父さんじゃないって言ってしまったんですね。なんでこの家族の輪の中に入ってきたんだ、ぐらいの、直接それを言ってしまいました。あまりにも嫌で仕方がなくて、父親は無言で上に上がってって、泣かしてしまってたんですけど、その後、私は直接見てないんですけども。

それから何だかんだと中学校行って、その中学生のときにリストカットが始まったんですね。自分の人間関係があまりよろしくなくて、薬とかじゃなくて、いじめがあったりとか、人間関係がとにかく良くなかった。グループって学校内で結構、当たり前に行けるっていうか、その一つのグループに私は入ってて、仲いいグループがあって、そこでいじめにあって、それからリストカットを覚えて、今でも残ってる先生がいて、その先生が私を別室に呼んでくれて、たばこで手を焼いてたりとか、手を切ったりとかしてて、その傷を見て、先生が…（中略）…おまえ、なんだ、その腕はって言われたんですね。でも、その先生は、怒るとか否定するとかじゃなくて、ただ泣いて、涙流して、腕をさすってくれたんですね。それが一番、記憶に残ってて、先生といえば、その後に、私は、リストカット止まらない状態。最初は浅かったんですけど、止まらない状態でした。

高校生になって、高校で幼なじみだったりとか、新しい友達ができたりとかするんだけど、それでも人間関係がうまくいかない。多分、私は、記憶にないんだけど、周りからの話によれば、すごいKYで、人が話してるのに割り込んできたりとか。あと、すごい自己中心的な行動ばっか取って、人の悪口言ったりとか、人に当たり散らしたりとかして、嫌な自分。そもそも私が逆の立場やったら一緒にいたくないなって思うような人間だったんです。高校でも孤立してて、友達もいなくて、相談する相手もいなくて。それで高校生生活を終えましたね。あんまり私にとって、学校って、そんなめっちゃ楽しかった、青春したっていわれたら、そんな楽しくなくて、青春してなくて、リアルな話をすれば。

大学に行ったんですけど、短期大学でトータルビューティーコースに通ってて、そのときも、最初の1年生までは、ちゃんと学校に行って、無遅刻、無欠席で学校に行って、ちゃんと勉強も受けて、テストもちゃんとして、成績もちゃんとある程度の並の成績はちゃんと安定しててっていう 1

年生だったんですけど、最後の大学 2 年生のときに、私が 18 人ときから水商売を母親の背中を見てじゃないけど、水商売を始めて、そのときに 19 歳のときかな。に、その水商売で一緒に働いていた人にマクドに行こうってなって、夜の 9 時から朝の 8 時までフルで働いてて、ものすごく疲れてたんです。その働いてるボーイさんが朝マック行こうって、すごいテンション高かったんですけど。私は、疲れてるからええわって、きょうは、ええわって帰るわっていったら、そのときに一緒に働いてた友達から、これ飲んだら、行く気になるから、飲んでみいやって言われたのが、処方薬、眠剤でした。私は迷いもなく、だったら、みたいな感じで飲んで。あり得ないぐらいのテンションになってしまって、じゃあ行こう、今から、みたいなその差。さっきまでここにおったのに、ここにいる、みたいなテンションがこんななって。マックに行って、その日から私は、たった 1 錠で、はまってしまいました。それから、その友達からワンシート買ったり、何シート買ったりとか、2000 円払ってとかしてたんですけど、それが病院でもらえることを知ってしまって。それから、病院に通うようになって、友達からの薦められた病院だったり、自分で探した病院だったりして、診察券もこんなたまってきた、いろんなところに行くから、1 カ月の処方してもらっても、1 カ月は持たないから、いろんなところの病院に行って。また 1 カ月分もらって、ここで 1 カ月分もらってっていうのをしました。だから、だんだん体重も落ちてくし、私も摂食障害なので、食べ吐きはそのときしてなくて、薬で全部体重落としてました。拒食、完全に拒食、何にも口に入れない状態を 3 カ月間ぐらいやった後に、体重測ったら、30 キロ台まで落ちてて、その 30 キロ台まで落ちてる自分も美しいって。満足、もっと落としたいって思っていました。それが病気の恐ろしさっていうか。なんぼやっても足りひんっていう。

私はその後かな。学校卒業して、大学卒業して、就職したんですね。アパレルに。アパレルに就職して、そのときも眠剤を使ってる状態なので、頭が停止してしまってるので、何も情報が入ってこない。接客業なのに、お客さんが来ても何もアプローチができない状態で。しまいには、裏のほうで切れてきたら、薬が切れてきたら、裏にこそっと行って、飲み物飲んできますとか言ってる。眠剤をカプリと食べて、また出てきて、変なテンションでまた接客したりとか。休憩中に錠剤飲んで、帰ってきたときに変なテンションみたいな、それをずっと繰り返してました。結局、仕事もできない。だって全然、仕事の内容が入ってこないし、稼ぐにも稼げられへんし。ノルマとかあってもノルマを達成しない状態で、どんどんうつになって。最後は、私が最後の出勤日だったんですけど、それが、そのときに、持ってた錠剤を全部飲むんですけど、100 錠ぐらい飲んで、お酒と一緒に飲んで、近くの歩道橋の下に降りて。ビュンビュン車が通ってるんですけど、もう死にたいって思って。そこに飛び込もうとしました、車に。多分、あれは、すごい救われたなと思うんですけど。たまたま通ってた車の人が、ばあって降りてきて、私をやめてくれたんですね。ものすごい勢いで。おまえ、まだ若いやろって、死ぬなって言ってくれたんです。でも、私はそのときパニックだった。やめんといって暴れだして。その後、保護されて、母親と母親の友達が泣きながら迎えに来てくれるんですけど。車に乗って帰ろうってなったときに、私は車の後ろで、また薬の箱を開けて口に運んで飲んでました。でも、自分は依存症やと思ってなかったです。これが普通や、みたいな。生活のルーティンっていうか、生活の一部やと思ってたんで。そういう薬物の抵抗っていうのはなかったです。

でも、やっぱ最後は、コカイン、薬物を使ってしまいました。それが 5 年前の 12 月ぐらいなんですけど。12 月にある島に行ったんですね。知り合った男の人と、島に行って。そこで、そのホテルにバーが付いてて、私、お酒飲むのも大好きなので、2 時間、3 時間前、家出る前に、麻薬、コカインを体に入れて出発して。バーに行って、いろんなお酒を飲んで、そこから、パタッと記憶がなくなってしまって。次、パタッと起きたときに、一緒にいた男性の首がポンって飛ぶ幻覚を見て

しまったんですね、私は。そんなとき、なんか知らないけど、すっぽんぽんだったんです。お風呂入る前やったのかな。分からないですけど。すっぽんぽんで。私、そのときに、首飛ぶ幻覚を見て、パニックになって。これは逃げなきゃいけないと思って、私は、服も何も着ずに、すっぽんぽんの状態で、ホテルを飛び出して、その島を走り回りました。夜中の 2 時の真冬に。

次、記憶があるのが、コンビニにすっぽんぽんの状態でコンビニに入ってた、店員さんに胸ぐらつかんで、助けてくださいって言って、また記憶がなくなって。次、記憶があるのが、こんなでっかい毛布にくるまってる自分がいて、また記憶がなくなって、また記憶が戻ったときに、車いすに乗ってたのかな。で、また記憶がなくなって、戻ったら、病院のベッドの上でいて、また記憶がなくなって、戻ったら、お母さんがいるっていう。ブラックアウトっていうんですけども。記憶がとびとび状態になってしまって。で、私が自分で何起こしたかも知らないし。むしろ、すっぽんぽんで走ったのも夢やと思ってたんで。そんなの、やってるわけがないと思ってたんですけど。母親の一言。おまえ、すっぽんぽんで走ったって、どういうことやって、めっちゃ怒られて。ちょっとトイレ行ってくるって言って、トイレに行ったら、ドア開けたら、警察が座ってどんと待ってたんですね。私は自分のことじゃないと思ってるから、なんでいるんやろって。私が病院運ばれたこと、心配してくれてんのかなっていうぐらいにしか思ってたんで。

また戻ってって、何かお母さんが、コカインってどういうことやってなって。もう血の毛引いて。あの警察は私をお迎えに来てくれただけなんやと思って。そのときに、連れて行かれて。こんな大きいバケツを持って、切れ目だったんで、ゲボゲボ二日酔いと切れ目の状態、離脱症状でゲボゲボ、こんな大きいバケツにずっと吐きながら、話をして。それでも私は帰れると思ってたんで、いつ帰れんやろう、早くたばこ吸いたいわ、お酒飲みたいわ、漬かりたいわ、みたいな、頭の中そんなんでいっぱい。ちょっと時間たってから警察の方が逮捕状持ってきて、逮捕状って言ってガチャッってなって連れていかれて。そのときに、私、ミンティア【お菓子の名前】の中に薬を隠してたんですけど、ばれなかったんですね、そのときにはまだ所持が。留置所に行ったら、また荷物検査があってミンティアってなって、パカって開けて、バレたっていう。そのときも血の気が引いて、これは終わりやと思って。でも、それがきっかけで、私は、5 年前の 2 月 10 日に拘置所から出てきて、栃木のシェルターにつながって、そのときも何だろう。宗教に来てしまったって。お母さん、ここは駄目です。宗教に来てしまいましたって心の底から思ってた。食堂があるんですけど。みんながご飯作ってくれて、みんなでいただきますって言って食べる時間があるって、そのときも絶対、みそ汁の中に毒入ってるって。だから、そのみそ汁作ってるところ、こうやってのぞきにいったら、あのおばさん絶対、みそ汁入れてるわ。みそ汁に毒入れてるわって。妄想の世界と、私がすっぽんぽんで島を走ったことも、みんな、知ってるんやって。みんなは信じられない状態でつながりました。

そのときも摂食障害も依存するものがないから、薬は取りあえず使えないとこにきたんだぐらいでしかなかったんですけど。依存するものがないから、摂食障害がひどくなって、指、突っ込んで吐いて。いっぱい食べて、指、突っ込んで吐いてっていうのを 2 年ぐらいやって。ある人に、おまえは結婚しても子ども産んでも、それを吐き続けるのかっていわれた一言で、やめようと思って。吐くのをやめて、じゃあ今、ブクブク太ってって、最近、筋トレ頑張ってるんですけど。でも、ブクブク太ってってる自分が今でも受け入れられなくて、吐けるもんなら吐きたいわって。痩せられるもんなら、痩せたいわって。でも、そこでは今、薬には結びつかなくて。だったら、どうするって。食べたいんやったら運動すればいいし。運動が嫌なんやったら食事制限すればいいし。健康的な痩せ方を今、手探り状態で探してます。

リストカットも、もう 5 年間はリストカットはしなくて。でも、最後にした 5 本傷があって。それは今でも生々しく残ってます。これを見るたびに、過去に戻ってしまったりとかしちゃって。あ

のとき、つらかったな。このとき、あれやったな。でも、こんな傷残すまで、しんどかったかな。でも、残ったことに後悔やなとか、いろいろ思ったりもします。だから、今のこの季節が、すごい今、自分はつらいですね。なので、日焼け止めのサポーターをして、見えないように半袖着たりとかしてます。ちょっと恥ずかしいっていうか。

男性に関しては、今、入寮中で私も、恋愛禁止なので5年間、恋愛してないんですけども。でも、まだ結婚もしたことないし、子どもも産んだことないので、子どもは、まだ考えてないんですけど。結婚は全然したことないので、やっぱりそういうのもいつかはと思っております。でも今、すごい薬やめて3年たつんですけど。楽しいです、普通に。しらふ、使っていない時間もすごい楽しいなと思うし。使ってたときは違う意味で楽しかったっていうか、でも、どん底だったし、苦しかったし。めちゃくちゃだったし、家族も崩壊寸前までいって、してたんだけど。最近、家族が土日に来てくれて、京都から高知まで来てくれて、会うことができて。ちょっと埋め合わせできたかなっていう時間があったりとかして。毎日が楽しいなと思っています。ここに来るのもすごい緊張して、何しゃべろうって思ってて。この帰りたいとか思って、車乗ったりとかしてたんだけど。でも今は、来れてよかったなと思っています。なので、ありがとうございました。以上です。

【マフさん】

昨日、そこに座って、ダルクの代表の[宮本]容子さんと話をしてて。明日、大学行かない？って言われて、いいですねって言って。話すつもり、全然なかったんですけどね。いや、話すんだよって言われて、全然だから何も考えてないんですけど。いい季節ですね。僕はこの季節、一番好きなんです。高知へ来て、11年目か。ちょうどあと1週間かな。あと1週間でちょうど12年目に突入っている感じですね。薬が止まっている期間も、イコールでクリーンタイムの11年です。大体、みんなと一緒になんですけどね。前に話してくれた仲間3人と大体一緒です。家庭のなかには、いつも緊張があって、緊張がありましたね。大体、緊張、ビビってましたね。家の中では。やっぱり僕も兄貴からの暴力だったっすね。結構、ひどかったんじゃないかなと思うけど。つい最近まで、あれが異常なことだったっていうことに気付かなかったっすね。ほんとつい最近まで。僕、今ね45歳なんですけど。本当45年も気付かなかったわ。仲間と話してて、昔の頃の話、昔の幼少期の話とかをしてるときに、それはちょっと異常だねと。それ、虐待だと思うよっていわれて、初めて気が付いたっていう感じで。やっぱりそういう環境にいたから。困っていることは、何なのか分からないっていう、多分、状況だったんだと思いますね。そんな感じだったっすね。小さいころは。

小学校のときはどんな感じだったかな。学校、嫌だったな。本当に学校行くの嫌だった。学校に行くのが嫌過ぎて、登校中に公園で寝たりしてましたね。公園に行って寝て時間が過ぎるのを待つ、みたいなことをしたりとかはしてましたね。忘れ物がめちゃくちゃ多くて、ああいう学校にある柱に方眼用紙が貼ってあって、忘れ物すると、そこにシール貼ってくんですよ、先生が。僕だけ突き抜けちゃって。方眼用紙の柱の一番上までいっちゃって、毎日、必ず忘れ物するから。忘れ物をすることが悪いことだと思ってなかったし。なんかあんまり気にしなかったんですよ。どんどん増えてく、みたいな感じで。僕はマフネっていうんですけど。マフネくんは駄目です、みたいな感じで、机を廊下に出されて。あなたは廊下で勉強してください、みたいな、そんな感じだったっすね。

友達とかは、いたかな。いなかったんじゃないかな。基本的に一人でしたね。ずっと一人だった気がしますね。一緒に遊んだりする人とか、友達とかいましたけど。一緒にいたの、楽しくなかったっすね。気を使ってたから。お兄ちゃんと同じような気の使い方をしてた。僕と兄貴の関係が、友達にも同じような関係だったっすね。だから、友達が気に入るようなことは喜んでやってたけど。本当の自分じゃないんで。楽しくも、何ともなかったっすね。

いちばん楽しかったのは、トレーシングペーパーってあるじゃないっすか。半透明の紙。あれの束があって、家になぜか。それを少年ジャンプの上に載つけて、下に透けてくる下の絵をトレースするんですよ。それが大好きで、一日中やってましたね。家帰ってそれをやっていると、気が付いたら真っ暗になってるんすよ。多分、逃避だったと思うんですけど。現実逃避してたんだと思うんですけどね。あれが好きだったな。夢中になれるからね。そういうなんか一人でできる夢中になれること。さらに自分にもできることは好きだったっすね。サッカー少年団とか、そんなのも入ったりしましたが。なんか楽しくなかったな。面白くも、何ともなかったですね。小学校のときはこんな感じだったっすね。

中学校に入ったら、中学校に入ると人間関係がしんどくなってきましたよね。皆さんも、よく知ってると思いますけど。中学校ぐらいの頃から、人間関係がしんどくなってきて。見つかったりしてたんでしょうね。いじめられたりもしてたし。中2のときに顔面神経まひっていう病気になって、多分、ストレスじゃないかって先生、言っていましたけど。顔が動かなくなる。表情が作れなくなった時期がありましたね。学校休んだりとか、いろいろして。そんなときのことをよく覚えてるかな。あとは、あんまり覚えてないですね。印象深い先生とか、もういないし、いなかったっすね。先生に相談するとかっていう発想も出てこなかった。特に。小学校のときの経験が結構、強かったんですかね。分かんないけど。何か先生、トイレ、行きたいですって手を挙げたら、我慢しなさいって言われて、そのままそこで小便もらしたってことがあって。すごい、そのときの恨みがかなり強力に残ってて。この人たちは味方じゃないんだなって思いましたね。今は、全然そんなこと思っていないですけどね。中学校ぐらいのときからお酒を飲み始めて、小学校のときもちよっと飲んでましたけどね。お正月におとそって出てくるじゃないですか。あれ飲むとお父さんが喜ぶんですよ。こいつ、顔赤くして酔っぱらってるわ、みたいな感じで。お父さん、喜ぶのがうれしくて、おとそを結構飲んでましたね。中学校ぐらいのときからお酒を飲み始めて、だんだん強いドラッグに変わってって、最終的には神の薬ですね。さっきも言ってた。ミツエちゃんは処方薬って言っていましたけど、僕は覚醒剤でしたね。覚醒剤にたどり着いて、孤独であるとか、人間関係のプレッシャーとかね、力関係ですかね、どっちかっていうと。男性は結構、分かるかもしれないですけど。男の人、集まると、絶対力関係できますから。職場での力関係が結構、ひどくて。そのときに一気に量が増えたかな。あと、自分がどう見られてるのかっていうのが、いつも気になってたっすね。自分がどう見られてるのかっていうより、この人はどういう機嫌なのか。この人、機嫌がいいのかな、悪いのかな。怒ってるのかな、怒ってないのかなっていうことをすごい気にしてましたね。職場の中で、そういう気にするストレスみたいなのが、すごい多かったんでしょうね。でも薬、使うとそういうこと考えなくてよくなって。いろんなことを超越できる感じになって、気にしなくなるっていうんですかね。分からなくなるんですけどね、実際は。分からなくなる感じがすごく好きでしたね。

あの時期、覚醒剤なかったら、どうなったかな。死んでたんじゃないかなと思います。覚醒剤があったから、やってけた、みたいな時期が、僕はあったと思います。だから、今でもそんなに悪いことだと思ってないですね、薬を使うことが。自助グループ、ダルクの中の文化っていえばいいのかな。風潮っていえばいいのかな。スタンスとして、薬を使うこと自体が、そもそも悪いことだと思ってない人たちの集まりなんですよ。いいんじゃない、みたいな。いいんじゃないとは言わないか。しょうがないよねか。そういうこともあるよねっていう立ち位置なんすよね、結構、みんな。だから、今でもいるのかなと思いますけどね。

令和4年（2022）10月28日受理

令和4年（2022）12月31日発行

